

第一小学校のチーム「立川ー6」が宇宙エレベーターロボット競技会にて全国3位



小学校科学教育センターから、4チームが令和元年11月4日に行われた全国大会へ出場し、第一小学校の「立川ー6」が「小学生部門第3位」の素晴らしい成績を収めました！「宇宙エレベーター」とは地球と宇宙をつなぐ夢の輸送システムです。



これをブロックでできたプログラミング教材で再現し、天井からつるした『ステーション』までピンポン玉を運び、それを降ろす際の点数を競います。地区予選を勝ち抜いた全国の小・中・高校生によって熱戦が繰り広げられ、小学校科学教育センターからの出場チームは2年連続で好成績を収めています。



写真提供◎月刊えくてびあん



図指導課・内線2497

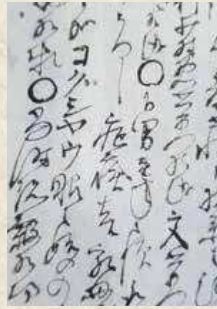
立川市の歴史と文化財

42

立川での「流行り病」



鈴木家文書
立川市指定有形文化財
「公私日記」(嘉永3年)



「うつし瘡瘡」の記述

今年に入って世界的に新型コロナウイルスが猛威をふるい、その感染症予防のため三月一日以降五月三十一日までの三か月間歴史民俗資料館および川越道緑地古民家園も休館・休園措置を取りました。今回は立川市域で流行した伝染病、特に天然痘(痘瘡)とインフルエンザ(流行性感冒)について史料をもとにみていきます。

江戸時代の主な病気を番付表にした「病薬道戯競」にもあるように、江戸時代の筆頭に挙げられる病は天然痘でした。天然痘が幼児の命を奪い、江戸時代の平均寿命を引き下げていたということはよく知られています。立川市域の古記録である鈴木家文書で、立川市指定有形文化財の「公私日記」(以下「日記」)の天保十四(一八四三)年二月四日の記述にも「瀧の上亀之助小兒源蔵悴は繁蔵娘三人引続今日迄四五日之間痘瘡二而三人死ス」と、痘瘡で子供が亡くなったことが記されています。「立川市史

下」(一九六九年刊)によれば、恐ろしい痘瘡除けのため、諏訪神社には痘瘡神が祀られ、病人が出た時は十人くらいが組んで、百度参りをする人もあったようです。

天然痘に対しては嘉永二(一八四九)年六月に種痘(天然痘の予防接種)治療が確立されました。多摩地域の種痘治療は、オランダ商館医師シーボルトの門人であった佐賀藩医・伊東玄朴の高弟とされる伊東玄民が務めたようです。「日記」にも嘉永三(一八五〇)年二月三日に「八王子玄珉療治二而申しまたけうつし瘡瘡(注)種痘のこと」(写真左)、同月十一日に「蘭家伝摸痘瘡受療として(中略)八王子伊藤氏江小兒さし遣ス」とあるように、八王子の玄民のもとへたびたび子供らが通院している様子がわかります。立川市域では当時としては比較的早い段階で高度な天然痘治療が受けられたと考えられます。

インフルエンザもたびたび蔓延していました。立川市域でも、おそらくインフルエンザの流行と思われる記録がいくつもあり、天保十四年の流行の際には、「当時御府内一統引風流行浜松風と異見いたし」(「日記」十二月十八日)と、江戸一帯で流行しており「浜松風」との名称が付いていること、また「此節世間一統風邪殊之外流行家々取臥候もの七八分也宿町湯洗湯渡世二不相成ほとんよし也」(「日記」十二月二十六日)と、家の者のうち七、八割が寝込み、宿場や銭湯が商売にならなくなるほどの状況になっている様子がわかります。安政四(一八五七年)の流行時には、「当節流行之風邪八都鄙一般京都大坂辺ハ猶はけしきよし風聞あり(中略)通例之流行風とは格

別之事二而近來稀なる風邪なるよし(中略)風邪二而死失の者も村々二あり」(「日記」二月七日)と、都会田舎問わず流行しており、まれにみるほどの悪い病状で、亡くなる者がいるほどの悲惨な状況が記録されています。また大正期には、立川の地域医療に貢献した医師・梅田市作が回顧談として「そのとき(注)大正九年は悪性感冒といったものがとても流行ってね。忙しかった」(『立川の生活誌 第六集 立川のお医者さん』二〇〇四年刊)と語っています。ここでいう悪性感冒は、「スペインかぜ」のことだと考えられます。大正七(一九一八)年から大正十(一九二一)年ごろまで、世界中で多くの罹患者・死者を出した「スペインかぜ」も、地域で流行していたことが窺えます。

では、人々は伝染病にどのように対処していたのでしょうか。立川では昭和初期まで、地縁的な家の繋がりがりである「組」で病人が出たときの相互扶助も行っていました。伝染病の時には、組の者が病人を戸板に載せて旧国立立川病院付近(現在の曙町一丁目付近)の病舎に連れていき、病人がいた家では入り口に縄を張ったといっています(『立川市史 下』)。

昔から恐れられてきた伝染病ですが、現在では治療法が開発されて予防できるものも多くあります。天然痘ですら、WHOがウイルス根絶を宣言し、現在では罹らない病になりました。新型コロナウイルス感染症に対して、これからもひとりひとりが、自分が感染しない、また人に感染させないための心掛け・思いやりをもって、心をひとつにしてこの難局を乗り越えましょう。

歴史民俗資料館(生涯学習推進センター文化財係) ☎(525)0860